

特集に当って

権藤 元

牧野編集委員長から「OR教育」の特集について、コーディネートのお話しがあったとき、まず頭にひらめいたのが、よく実務の教育の場面で引用される山本五十六元帥が座右の銘としていたという次の言葉である。

「して見せて、言って聞かせて、させて見て、ほめてやらねば、人は動かぬ」

ORが企業内に普及し、活用されて、企業の血となり肉となるためには、ORの教育に相当な努力がはらわれなければならない。特に、ORについて、して見せて、言って聞かせて、させて見て、ほめてやることを、どのように企業がとりくんでいるかを紹介することは、本年1月号に「これからのOR」という特集号があり、ORのニーズを書きたてたあとにつづく特集として、時宜を得た有意義な特集であると理解して、コーディネートをおひきうけた。しかし、ちょうど個人的に多忙なときで、まずは大学のOR教育の特集を先行させていただきとお願いした次第である。

さて、特集号のコーディネートをおひきうけたものの、企業におけるOR教育について、特に調査したこともないし、これからする余裕もないし、ぶっつけ本番で思いつくままに、いくつかの企業の知人に電話して欲しいし、快くおひきうけいただいた記事を中心に構成することとなった。したがって、4月号の「大学についてのOR教育」のように、3つの柱（第1が社会人を積極的に受入れてORの教育をしている大学院のOR教育、第2がアンケートによる各大学のカリキュラムなどの調査、第3がIFORSに設置されているEducation Committeeについての活動状況）という体系だったものとはならず、一個人の思いつくままに偏見と独断のまま、

ごんどう はじめ

近畿大学 工学部(元中国電力 勤務)

企業におけるOR教育の現状を紹介することとなった点はおゆるしいただきたい。

ただ、特集号としての形をととのえるために、3つの部分にわけて構成した。第1は、具体的なカリキュラムなどの紹介、あるいは、教育の特長をうきぼりにするように数頁にわたる記事として、兵庫県、近畿電気通信局、中国電力、川崎製鉄、協栄計算センターの5企業にお願いした。それぞれOR実施賞あるいはそれに準じる実績をもつところで、実務に役立つために種々の工夫をこらしているところを読み取っていただきたい。

第2として、軽く読物風にOR教育のスケッチをしていただいたのが、東亜燃料と田辺製薬であり、さらに、現在検討がすすめられている「現場のOR教育研究部会」でのパソコンによるOR教育について、検討状況を紹介していただいた。

第3の話題としては、立場をかえて、日頃企業に接しておられる大学の先生に「企業のOR教育」について、手厳しいコメントをお願いした。わさびのきいたものを期待したわけである。

これから企業内でOR教育を考えられる方々に大いに参考にさせていただきたい。しかし、考えてみると「して見せて、……ほめてみて」といっても、本来、ORに期待するもの、あるいはORのニーズが明確になっていないと、いくら熱心にOR教育を行っても、受講者は単なる教養講座とになってしまう。まずは、ORのニーズを認識することからはじめること、あるいは、さかのぼって潜在しているニーズを顕在化させることから、あるいはさらに、問題解決方法としてのORでなく、問題発見方法としてのORからはじめることが肝要であろう。このような観点からお読みいただきたいと思う。

なお、パソコンが手軽に使えるようになった現在、パソコンによるOR教育がもっと普及してよいと考えている。

(…カゲの声…OR教育といっても人の集まりはよくないが、パソコンの教育という魅力を感じる人が多いご時勢に目をつけたね…)

いずれ「パソコンとOR」を特集のテーマとして期待しているところである。

終りにりましたが、お忙しいところを快く原稿をお書きいただいた方々へお礼申し上げます。